日南田静眞研究

冨　岡　庄　一・秋　葉　節　夫

日南田静眞名誉教授は，略歴に示したように，1977（昭和52）年４月に，北海道大学経済学部から広島大学総合科学部に赴任され，1992（平成４）年３月停年退職されるまで，15年間本学部のために奉職された。在職中は，社会経済史を担当され，多くの学生・院生を指導された。また，多くの役職も経験され，本学部のために多大の貢献をされた。1992（平成４）年４月以降は，広島大学名誉教授として本学部の発展に協力された。日南田静眞名誉教授の研究分野は，ロシア経済史であるが，名誉教授以降も，この分野で斯学の発展に貢献された。しかし，2006（平成18）年３月２日，癌のため逝去された。享年77歳であった。本稿では，日南田静眞名誉教授の遺徳を偲ぶとともに，これまでその発展に貢献されてきたロシア経済史の業績を俯瞰し，あわせてそのすぐれた点をあらためて指摘することとした。日南田静眞研究と冠した理由はここにある。

日南田静眞名誉教授といえば，なんと言っても,『ロシア農政史研究－雇役制的農業構造の論理と実証－』（お茶の水書房，1966年）（以下，『ロシア農政史研究』と表記する）に集約される諸研究が挙げられよう。それら諸研究については，ソ連（当時）科学アカデミーのＡ．Ｍ．アンフィモフ氏がソ連（当時）の学術誌に紹介した論文がある（A.M. Анфимов. Аграрная история пореформенной России в работах японского ученого С. Хинада. История СССР, 1965, No.4)。日本人の研究者で，その研究が，ソ連（当時）で，このように包括的に紹介された例は，それまでなかったと思われる。アンフィモフ氏の論文に依拠しつつ，日南田名誉教授の業績を振り返りたい。

アンフィモフ氏は，革命前ロシアの地主経済，穀物生産，土地の貸借，土地所有等々，農業制度全般について研究され，更に農民運動，ストルィピン，ニコライ２世の研究にまで及んだ，優れた研究者であった。アンフィモフ氏は，上記論文の中で，以下のように，日南田名誉教授の業績を論じている。

日南田氏（以下，このように表記する）は，ロシア史の研究を，アンナ・ロチェスター『農民問題入門：レーニンはどう教えたか』（理論社，1956年）の翻訳（井上晴丸・南田健〔日南田静眞〕訳）から始めた。ロシア農業史に関する最初の論文は“A Study on the Agrarian Problems after the Stolypin Reform: With a Comment on Lenin's Theory of Agrarian Evolution from Feudalism to Capitalism”（『茨城大学農学部学術報告』第５号，1957年）で，以後，立て続けに興味深い論文を発表した。具体的には,「ストルィピン改革後農民問題の一考察:とくにロシア中央農業地帯における」(『土地制度史学』第１巻第１号，1958年)，「旧ロシア農民分解の論理」(全国農業会議所『農民各層の経済構造についての調査研究』〔調査研究資料第33号〕，1960年)，「『発達』農民層分解論の理解によせて」（『歴史学研究』第277号，1963年）である。日南田氏は，これらの論文で，レーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』をはじめとする諸論考に広範に言及し，「И．И．スクヴォルツォフ－ステパーノフ宛の手紙」におけ

るレーニンのロシア農業制度論について考察している。更に，ソ連（当時）であまり注目されていなかったゼムストヴォ統計に特に関心を示している。又，革命前の研究者達Ｂ．Ｅ．ポストニコフ，Ｈ．Φ．アンネンスキー，Ａ．Ｈ．エンゲリガルト，Ｃ．Ａ．コロレンコ等々の研究を引用し，ソ連の研究者達Ｈ．Ｍ．ドゥルジーニン，П．И．リャシチェンコ，Ｃ．Г．ストゥルーミリン，Ｂ．Ｃ．ネムチーノフ，П．Ａ．ザイオンチコフスキー，Ｂ．Ｋ．ヤツンスキー，Ｃ．Ｍ．ドゥブロフスキーそしてＡ．Ｍ．アンフィモフを，慎重に又は批判的に検討している。

次いで，日南田氏は，ソ連（当時）で正面から取り上げられていなかった雇役制（オトラボトカ制）に特別の関心を向け，ロシアの資本主義的再生産システムにおけるその意義を考察した。「ロシア農業における雇役制度の成立と展開」（『歴史学研究』別冊特集「世界史と近代日本」，1961年10月），「旧露資本主義と農業における雇役制度」（『茨城大学農学部学術報告』第９号，1961年）の諸論文である。ソ連（当時）では，雇役制は，農奴制の単なる遺制で，資本主義の発達によって19世紀末に衰退したと考えられていた。雇役制が，19世紀末に，衰退したのか又は発展（展開）したのかを，直接示す資料はない。しかし，日南田氏は，雇役制の主たる担い手と思われる役馬１頭持ち農民及び役馬２頭持ち農民の数が相対的・絶対的に増加したことを指摘した。そして，中央部ロシアで，雇役労働報酬と日雇報酬とが同水準にあり，低報酬水準が高借地料水準と見合っていたことを指摘した。雇役制は，ロシアの資本制下の低労賃を規定した。このような形で，雇役制は，ロシア資本主義の再生産を保証していた。つまり，日南田氏は，ロシア資本主義の再生産における雇役制の位置付けを明らかにし，雇役制がロシア資本主義の再生産構造に組み込まれていたことを主張した。雇役制は，封建制から資本主義への単なる移行形態ではなかった。

以上，アンフィモフ氏の「日南田静眞研究」を簡単に紹介した。日南田名誉教授のこれら諸研究は，『ロシア農政史研究』に集約された。アンフィモフ氏の指摘に関連する箇所を一カ所だけ引用しておこう。「雇役労働諸報酬をえても日雇報酬をえても年雇・季節雇報酬をえても，また借地して借地料を払うばあいでも，…いずれにせよ地主取分２対農民取分１というあり方が強く貫いている。私は，…中央部ロシアに支配的なこのような（農民の）労働報酬の体系を，雇役制的労働報酬体系とよび，これが雇役制度を媒介しているものと考える。この体系が存在するかぎり，中央部ロシアでは地主と雇役農との間の雇役制的関係はたえず再生産され，資本制的関係に向かいうる純農業労働者層の発生・増大などの新条件はたえずたち切られる。しかもなお，この体系の存在によってこそ，南部辺境や工業中心地における農業および工業への低賃金『出稼ぎ』労働者の流出は保障され，その地の資本制的関係再生産の一端が直接に保障される…。」（『ロシア農政史研究』，252頁）

日南田名誉教授は，「雇役」という訳語について次のよう考察しておられる。オトラボトカ（отработка）を「雇役」と訳すのは「レーニンの関連著作の本邦初訳以来の慣行となっているが，これはまったくまずい訳語のように思われる。…私としてはむしろ『債務弁済労働』が語義的にも内容的にもベターだと思うが，慣れた日本語でもないので，一応旧慣に従っておく」（『ロシア農政史研究』，62－63頁）と。後に，日南田名誉教授は，雇役制の代わりに，「オトラボトカ制」という表現も使っておられる。

日南田名誉教授は，著作目録に示されるように，『ロシア農政史研究』出版以後も，ロシア史の研究を広範に展開されている。更に，Ｉ．ウォーラーステイン（日南田静眞監訳）『資本主義世界経済Ⅱ，階級・エスニシティの不平等，国際政治』（名古屋大学出版会，1987年）を翻訳することによって，日本の学界にも幅広い影響を与えたウォーラーステインの世界システム論を理解する上で大きく貢献しておられる。

故日南田静眞名誉教授略歴

1929年２月１日	広島県に生まれる
1945年３月	広島高等師範学校附属中学卒業
1945年４月	海軍兵学校入校（第77期，工305分隊）
1951年３月	東京大学農学部農業経済学科卒業
1953年３月	東京大学大学院農学部農業経済学科満期退学
1953年３月	茨城大学助手農学部
1964年10月	茨城大学助教授農学部
1970年10月	北海道大学教授経済学部
1977年４月	広島大学教授総合科学部（1992年３月停年退職）
1992年４月	広島大学名誉教授
1992年４月	吉備国際大学社会学部教授（2004年３月退職）
2006年３月２日	広島市にて逝去

故日南田静眞名誉教授著作目録

＊単著はすべて著者名を省略

（近藤康男・日南田静眞・志村賢男編）『内水面漁業協同組合の性格：長野県下四漁業協同組合の調査』，水産研究会，1951年。

（近藤康男・日南田静眞）『内水面漁業の類型：全国漁業会調査によるドット・マップ』，水産研究会，1951年。

（近藤康男・日南田静眞）『内水面漁業の類型：アンケート調査による分析』，水産研究会，1952年。

（近藤康男・日南田静眞）『農山村の半封建的権力機構と漁業協同組合：岐阜県洲原村及仝石津村実態調査報告』，水産研究会，1953年。

「『輪中』の村の地主制：岐阜県海津郡石津村」，―― 近藤康男編著『むらの構造：農山漁村の階層分析』，東京大学出版会，1955年。

〔翻訳〕アンナ・ロチェスター（井上晴丸・南田健〔日南田静眞〕訳）『農民問題入門：レーニンはどう教えたか』，理論社，1956年。

“A Study on the Agrarian Problems after the Stolypin Reform: With a Comment on Lenin's Theory of Agrarian Evolution from Feudalism to Capitalism”，――『茨城大学農学部学術報告』第５号，1957年。

「ストルィピン改革後農民問題の一考察：とくにロシア中央農業地帯における」，――『土地制度史学』第１巻第１号，1958年。

「レーニンの雇役制度論」，―― 近藤康男博士還暦記念出版会編『日本農業の地代論的研究』，養賢堂，1959年。

「東ヨーロッパの農地改革に関する研究(1)」，――『茨城大学農学部学術報告』第７号，1959年。

「旧ロシア農民分解の論理」，―― 全国農業会議所『農民各層の経済構造についての調査研究』（調査研究資料第33号），1960年。

「近代ロシア農業史研究の『新しい波』：A．M．アンフィモフ氏らの近業によせて」，――『ロシア史研究』第２巻第２号，1961年。

「ロシア農業における雇役制度の成立と展開」――『歴史学研究』別冊特集「世界史と近代日本」，1961年10月。

「旧露資本主義と農業における雇役制度」――『茨城大学農学部学術報告』第９号，1961年。

「大学管理制度改悪とロシア史研究者」，――『ロシア史研究』第６号，1962年。

「『発達』農民層分解論の理解によせて」，――『歴史学研究』第277号，1963年。

「旧露農業構造研究における1課題:アンフィモフ新著の紹介を通じて」，――『土地制度史学』第20号，1963年。

「19世紀末旧露地主農業経営の分析」，――『茨城大学農学部学術報告』第11号，1963年。

“Основной характер аграрной структуры в России в конце XIX века”，――『茨城大学農学部学術報告』第12号，1964年。

『ロシア農政史研究：雇役制的農業構造の論理と実証』，御茶の水書房，1966年。

〔翻訳〕レーニン『貧農に訴える』，――江口朴郎責任編集『レーニン』（世界の名著第52巻），中央公論社，1966年。

「チャヤノフ小農経営理論の一考察：ロシア農業史研究者の視角から」，――農業経済学会1967年度大会個別報告（於日本大学獣医学部，1967年４月９日）。

「ストルィピン農業改革」，――江口朴郎編『ロシア革命の研究』，中央公論社，1968年。

「ロシアの1905年革命」，――岩波講座『世界歴史』第23巻，岩波書店，1969年。

「1905年初冬(1):『ロシア革命の農民問題』考」，――『初原』創刊号，1970年。

「父の遺志を継ぐもの」，――『楽天:石井正の思い出』，1970年。

「ロシア資本主義とミール共同体：林氏の新著によせて」，――『社会科学の方法』第５巻第５号，1972年。

「1905年ロシア農民運動史の１事例」（第１次ロシア革命：1971年度〔ロシア史研究会〕大会特集），――『ロシア史研究』第18号，1972年。

“The Russian Peasant Movement in the Era of Imperialism: A Socio-Economic Sketch”，――*Hokudai Economic Papers*, Vol.3, 1972-1973.

「スチェパーノフ『帝国主義論』について」，――北海道大学『経済学研究』第23巻第１号，1973年。

“Русский капитализм и отработочная система в сельском хозяйстве России”，――『スラブ研究』第18号，1973年。

「帝国主義論と『２つの道』論：スクヴォルツォーフ・スチェパーノフの場合」，――『立命館経済学』第22巻第５・６号，1974年。

「マルクスの『農耕共同体』論：１つのテクスト・クリティーク」，――北海道大学『経済学研究』第24巻第１号，1974年。

〔書評〕有馬達郎『ロシア工業史研究：農奴解放の歴史的前提の解明』（東京大学出版会，1973年），――『歴史学研究』第407号，1974年。

〔翻訳〕Ａ.ヴァリツキ（日南田静眞・松井憲明・高橋馨・冨岡庄一訳）『ロシア資本主義論争:ナロードニキ社会思想史研究』，ミネルヴァ書房，1975年。

“On the Meaning in Our Time of the Drafts of Marx's Letter to Vera Zasulich (1881)”, With Textual Criticism，――『スラブ研究』第20号，1975年。

（江口，野原，野沢，日南田〔静眞〕，今井，池庄司，キム，和田）「討論」（第Ⅲ部「革命的ナロードニキ主義史の諸問題」），――『革命ロシアと日本：第１回日ソ歴史学シンポジウム記録』，弘文堂，1975年。

「1881年問題：和田春樹氏およびヴァリツキ氏の両新著によせて」，――経済史研究会報告（於北海道大学，1975年８月６日）。

“Russian Capitalism and Its Agrarian Structure (“Otrabotki” System)”, Part 1. Basic Courses of Development of Russian Capitalism, ――*Hokudai Economic Papers*, Vol.5, 1975-1976.

「ソヴェトにおける革命前ロシア社会経済史学界の状況について」，――経済史研究会報告（於札幌市定山渓，1976年３月14日）。

〔書評〕和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』（勁草書房，1975年），――『史学雑誌』第85編第11号，1976年。

「Ｓ.パールマンのロシア革命・農民運動論」，――北海道大学『経済学研究』（鎌田正三教授退官記念号）第27巻第１号，1977年。

「コメント」(ロシアの農民共同体について:〈特集〉共同体の歴史的意義),――『史潮』第2号,1977年。

「ロシアの『農民の指令』について」,――椎名重明編著『土地公有の史的研究』,御茶の水書房,1978年。

(倉持俊一・高田和夫・鈴木健夫・荒田洋・下斗米伸夫・奥田央・肥前栄一・今井義夫・松原広志・庄野新・日南田静眞)「1977年度総会での討論:〈特集〉ロシア・ソビエト史における共同体」,――『ロシア史研究』第27号,1978年。

「20世紀初頭におけるロシアの農業=農民問題:その構造的特質と変革への展望」,――土地制度史学会編『資本と土地所有』,農林統計協会,1979年。

「革命前ロシア社会の構造的把握について」,――『ロシア史研究』第30号,1979年。

「農民における平和(ミール)的秩序の希求:20世紀初頭ロシアの場合」,――広島大学総合科学部紀要Ⅱ『社会文化研究』第7巻,1981年。

「ロシア農民共同体と社会変動:『比較社会体制論』のために」,――広島大学総合科学部紀要Ⅱ『社会文化研究』第8巻,1983年。

「ゲフチェルとアンフィモフ」,――スラブ研究センター研究報告会副報告(於北海道大学,1983年1月29日)。

「第1次ロシア革命期農民運動の特質」,――社会経済史学会第54回大会個別報告(於北海道大学,1985年9月29日)。

〔書評〕ペ・ア・ザイオンチコーフスキー(増田冨壽・鈴木健夫訳)『ロシヤにおける農奴制の廃止』(早稲田大学出版部,1983年),――『社会経済史学』第50巻第4号,1985年。

"Characteristics of the Russian Peasant Movement under the *Otrabotki* System",――広島大学総合科学部紀要Ⅱ『社会文化研究』第11巻,1986年。

"Особенности русского капитализма: Рассмотрены на основе изучения общенародной и крестьянской революции 1905 года",――広島大学総合科学部紀要Ⅱ『社会文化研究』第12巻,1987年。

〔翻訳〕Ⅰ.ウォーラーステイン(日南田静眞監訳)『資本主義世界経済Ⅱ,階級・エスニシティの不平等,国際政治』,名古屋大学出版会,1987年。

"Аграрный вопрос в России и Японии в начале 20 в.: Сравнительный очерк",――広島大学大学院社会科学研究科『社会文化論集』第1号,1990年。

「オトラボトカ制的農業構造と農民運動:帝政ロシアとペルーにおけるその比較分析」,――開学記念論文集編集委員会編『国際社会研究の視座』,高梁学園吉備国際大学,1990年。

〔書評〕(日南田静眞・中川雄二)大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究:帝政ロシアの経済と政治』(ミネルヴァ書房,1989年),――『歴史学研究』第609号,1990年。

"Беседа с японским историком",――≪История СССР≫,1991,№.1.

「1905,6年ロシア農民運動分析:サラトフ県事例を中心に」,――広島大学総合科学部紀要Ⅱ『社会文化研究』第17巻,1992年。

〔書評〕岡田与好編『政治経済改革への途:ヨーロッパにおける若干の経験』(木鐸社,1991年),――『社会経済史学』第58巻第4号,1992年。

"Крестьянское движение в дореволюционной России",――『吉備国際大学社会学部研究紀要』第5号,1995年。

〔書評〕青柳和身『ロシア農業発達史研究』(御茶の水書房,1994年),――『土地制度史学』第148号,1995年。

「ストルィピン土地改革直前の政府と農民」,――『吉備国際大学社会学部研究紀要』第7号,1997年。

「ストルィピン土地改革再考」,――梶井功編著『農業問題:その外延と内包』(近藤康男先生白寿記念論文集),農山漁村文化協会,1997年。

〔書評〕広沢吉平著・近藤康男編『中国農政史論:唐・宋・元・明・清代』(筑波書房,1997

年)，――『農林水産図書資料月報』第49巻第５号，1998年。
（市川浩・日南田静眞・加藤房雄・中川雄二・冨岡庄一・田村和之）「ミニ・シンポジウム『ロシア史像の転換：冨岡庄一『ロシア経済史研究，19世紀後半～20世紀初頭』（有斐閣，1998年）をめぐって』の記録」，―― 広島大学大学院社会科学研究科『社会文化論集』第６号，1999年。
「1906年６月20日ロシア政府声明に関する小論」，――『吉備国際大学社会学部研究紀要』第９号，1999年。
『近代世界社会経済史：ウォーラーステインに学びつつ（講義とノート）』，アーバンプロ出版センター，2001年。
『近代以前の世界社会経済史（講義とノート）』，アーバンプロ出版センター，2002年。
「ロシア西南地方・小ロシア地方における1905－6年の農民運動」，――『吉備国際大学社会学部研究紀要』第12号，2002年。
「田中先生から与えられたもの」，―― 田中真晴先生を偲ぶ会『追想　田中真晴先生』，2002年。
「19世紀末～20世紀初頭の東清鉄道問題」，――『19世紀末～20世紀初頭極東国際関係史の実証的研究』（学内共同研究成果報告書），吉備国際大学，2005年。